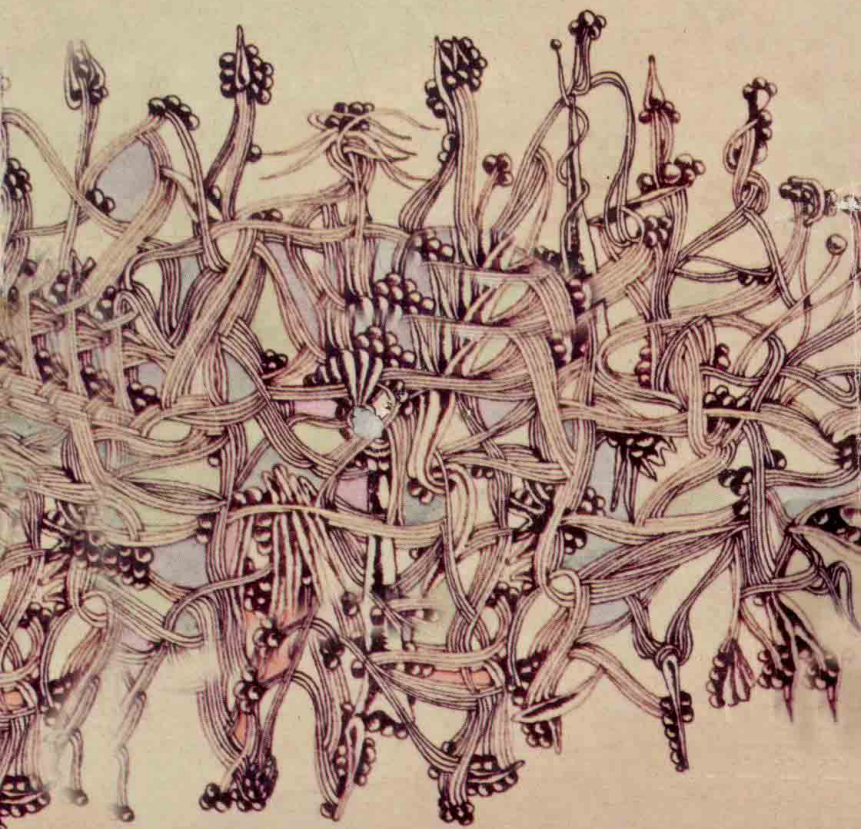


砂の上の植物群

吉行淳之介



すな　うえ　しよくぶつぐん
砂の上の植物群

定価 240 円

新潮文庫 草 143 C

昭和四十二年四月二十五日 発行
昭和五十三年十二月十五日 二十四刷

著　　者　　吉　行　淳　之　介
よし　ゆき　じゅん　の　すけ

発　行　者　　佐　藤　亮　一
さ　とう　りやう　いち

発　行　所　株式會社　新　潮　社
しん　しやう　しゃ

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六五一
編集部(〇三)二六六五四二
振替　東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

砂の上の植物群

吉行淳之介著

新 潮 社 版

1760

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

砂の上の植物群……………七

樹々は緑か……………一七

解説 磯田光一

砂の上の植物群

砂の上の植物群

港の傍に、水に沿って細長い形に拡がっている公園がある。その公園の鉄製ベンチに腰をおろして、海を眺めている男があった。ベンチの横の地面に、矩形のトランクが置いてある。藍色に塗られてあるが金属製で、いかにも堅固にみえる。

夕暮すこし前の時刻で、太陽は光を弱め、光は白く澱んでいた。

その男は、一日の仕事に疲労した軀を、ベンチの上に載せている。電車に乗り、歩き、あるいはバスに乗り、その日一日よく動いた。靴の具合が悪くなり、足が痛い。最後に訪れた店がこの公園の近くで、その店で用事を済ませると、男は公園にやってきた。男は、化粧品のセールスを仕事にしている。

彼の前にある海は、拡げた両手で抱え取れるくらいの大きさである。右手には、埠頭が大きく水に喰い込んで、海の拡がりを劃っている。埠頭の上には、四階建の倉庫があった。彼のトランクのような固い矩形の建物である。白いコンクリートの側面には、錆朱色に塗られた沢山の鉄扉が、一定の間隔を置いて並んでいる。

左手には、長い栈橋がみえる。横腹をみせた貨物船が、二本の指でつまみ取れるほど小さく眼に入ってくる。貨物船は幾隻も並んで碇泊しているので、白い霧の中に重なり合った帆柱やクレー

ーンが、工場地帯の煙突のようにみえる。

眼の前の海を、右から左までゆっくり眺め渡した彼は、視線を中央に戻した。そこには小さな貨物船が舫^もつてあり、正常な船の上側を匙^{さし}ですくい取ったような形をしていた。そのすぐ傍に、さらに二まわりほど小さい貨物船があつて、それは後肢^{あとあし}をもぎ取られて地面に腹這^{はらば}っているバツタに似た形をしている。

彼は、その二隻の船を、暫^{しばらく}くのあいだ眺めていた。

「いま何かを思い出しかかっている」

それが何か、という答をすでに彼は意識の底で知っていた。しかし二隻の船の輪郭が眼の中で霞^{かす}んでゆき、その替りに心に浮び上ってきたものがしだいに輪郭を整えてゆくのを、彼は待った。

気持に余裕のあることを味わいながら、ゆっくりと待った。

二

彼の心に浮び上ってきたのは、一つの推理小説の着想である。

三年前、その着想に行き当たったときには、彼は繰返し思い浮べ、熱心にそれを撫^なでまわした。それまで読んだ沢山の推理小説には、彼の着想と同じものは見当らなかった。

書けるものなら、書いてみたい、と彼はおもった。定時制高校の教師である理由でやめて、化粧品^{化粧品}のセールスをはじめた頃だった。

その物語の主人公は、死病に罹^{かか}つた男と、傍を離れずに看病する若い妻である。その男はやがて死んでしまい、物語の中からその肉体は消え去るが、依然として主人公であることを罷^やめない。

次のような具合に、男は物語の中にとどまる。

その若い妻の貞節については、疑う余地がなかった。しかし、彼女の一つ一つの動作の継ぎ目や隙間^{すきま}から、生温かい性感が分泌物のように滲^{にじ}み出ている。彼女自身そのことに気付かないにしても、やがては熔岩のような暗い輝きをもった一つ一つの細胞の集積が、彼女を突き動かすときが来る。——その日のことが、瀕死^{ひんし}の床にいる男の眼の底に、鮮明に浮び上ってくる。

彼の死後、彼女が別の男と一緒になることを裏切りとはいえない。しかし、青白く脆^{もろ}そうでて容易に噛み痕^{かみあと}の残らない彼女の皮膚や、細く引締まった足首を見ていると、それは生命力の乏しくなった彼の軀に大きな負担となり、痛みさえ感じた。

近い将来、彼女を独占する筈の男に、彼は烈しい嫉妬^{しつと}を覚えた。それはやがて、憎悪に変わり、名前も顔も精神内容も何一つとして分らぬ未知の男にたいする復讐^{ふしゅう}を、ひそかに心に誓った。

彼が死骸になり、脆い灰白色^{かいはくしよく}の骨片になって素焼の壺に入れられ、土中に埋められる。壺は湿気を吸い込み、変色し、表面が苔^{こけ}のようなもので覆われるころ、彼の復讐が完成する。復讐の内容容といえ、彼女を独占している男を殺すことだ。

その方法は——。

彼女を兇器^{きようき}にする以外にない。彼女の無意識な一つの動作が、相手の男の生命を奪う。

一定の条件が与えられたときに、反射的に一定の動作を示す彼女の肉体の動きが、男にとって致命的なものとなる。その動作を彼女の細胞深く染み込ませるために、瀕死の彼は、繰返し一定の条件をつくり、彼女の軀をそれに反応させた。

彼女が他日兇器に変化するための準備を終えて、彼は死ぬ。序章は終り、そこから物語は本格的な段階に入るわけだ。

しかし、そこで物語は中絶し、その先に彼は考えを進めることができなかった。

条件反射のその動作を、具体的にどういふものにしたら適当なのか。その推理小説にとって肝心なトリックの内容も、彼は思い付くことができない。小説の中の妻に、その夫が教え込む筈の動作を、彼は思い付くことができなかった。

彼は諦めた。^{あきら}しかし、捨て去った筈のその着想が、不意に彼の頭に甦^{よみがえ}ってくる。その度に、彼は熱心にその序章の部分を心の中で繰返す。物語が行詰まるところまで丹念に辿^{たど}ってゆく。すでに分り切った道筋なのだが、倦^{あきら}きずに繰返す。

度重なると、彼は頭の中に浮び上りかかったものを追い払おうと試みるようになった。しかし、一旦彼の心の隅に、死病の男とその貞淑な妻の影が射すと、知らず識らずのうちに物語の行詰りまで、なぞってしまう。そのくせ、行詰りの先には、少しも考えを向ける気持にならなくなつた。

「その序章の部分に、自分にとって何かの意味が隠されているに違いない」
ある日、そのことに彼は思い当った。

三

そのことに思い当るまでには時間がかかったが、気付いて考えてみれば、隠された意味はすぐに分った。

それは、死んだ父親と彼との関係である。

その人物は、十九歳で彼の父親となり、三十四歳で死んだ。

しかし、死んだ後も、その人物は彼の人生の中で主人公の役を演じることをやめなかった。すでに肉体は消滅しているその人物が、しばしば彼の人生に立塞がり、彼に命令を下し、行先を定めたり限定したりした。

死後、十年経っても、十五年経っても事情は変らなかつた。彼が定時制高校の教師をやめ、化粧品化粧品のセールスマンになったのは、父親の死後十八年のことだが、その二つの事柄にも彼は自分を操る亡父の幻の手を感じた。

その場合、死んだ父親自体が兇器となつて、彼に襲いかかつてきた。推理小説の着想の底に、彼と亡父との関係が蟠わだかまっていることは、否定できない。

隠された意味が分つて以来、彼はその推理小説の序章が浮び上つてくると、不快なそして不安な心持に捉えられた。彼が避ければ避けるほど、それは類案ひんげんに彼を占領し、執拗しつとつに纏わり付いた。

四

ある日、執拗に彼を訪れてくるものと、突然、縁が切れた。

それから一年ほど経った現在、海に向って坐っている彼の頭に浮び上ってくるまで、それは影を潜めていたのである。

夕焼がはじまって、海がその色を映した。港の傍の公園で、ベンチに坐ったまま、久しぶりに浮び上ってきた推理小説の序章を余裕のある氣持でなぞってから、彼はその日のことを思い出した。

その日――。

早朝、不意に井村誠一から電話がかかってきた。学生時代の友人だが、長い間逢っていないかった。

「木暮が死んだよ」

井村の声が生真面目な調子でひびいた。木暮とも長い間逢っていないだったので、判断に迷った。

「病氣か」

「事故だ、山で遭難した」

木暮の頑丈な体格を、彼は思い出した。学生時代、木暮は山岳部に入っていた。当時、しばしば井村と一緒に木暮の家に遊びに行った。井村も彼もスポーツには縁が無かったが、木暮と交遊

があったのはその陽気で人づきあいの良い性質のためもあった。だが、それだけではない。

受話器のなかでは、井村の声がつづいていた。

「今夜が通夜だ。木暮の家で会おう」

その井村の声は、通夜に行くのを当然とおもっている口調だった。それは、そうだ。行かずに済ますことはできない。学生時代にしばしば木暮の家を訪れたのは、木暮に会うことよりも、むしろその美しい妹の姿を見るのが愉しみだったとしても。木暮の妹恭子は、木暮と違って華奢な軀つきで、性質も内気でむしろ陰気だった。木暮の家では、恭子は茶や菓子を選んでくれるだけで活潑に会話を交したこともなかったが、時折そのまま椅子に坐って控え目な笑顔を示していることがあった。そういうとき、椅子に坐ったまま首をまわして、井村が熱心に飾り戸棚を見詰めていたことがある。彼が井村の視線を辿ると、飾り戸棚のガラスが鏡の役目をして、恭子の横顔が映し出されていた。その井村の思い詰めた表情に、彼はたじろいだ記憶がある。

卒業してからは、木暮と疎遠になった。やがて、恭子が結婚したという噂を聞いたが、いずれにせよ通夜で恭子の姿を見ることができるわけだ、と彼はおもった。

その日の夜、木暮の家の玄関に立って、彼は呼鈴に指を当てた。十五年前と同じように、一瞬ためらった後、指の腹で強くボタンを押した。十五年前には、その瞬間にかならず恭子の姿が脳裡を掠めて過ぎたものだ。

家の中には沢山の客がいた。見覚えのある顔も幾つかあったが、恭子の姿は見当らない。見知らぬ女が、酒肴の世話をして立働いているのが目立った。木暮の細君だろう、と彼はおもった。

異常なまでに肥った女で、膨れ上ったというのがふさわしい軀に似合わず、身軽に動きまわっていた。それが陽気にさえみえるので、一層目に付いた。

彼が部屋の入口に立ったままではいると、その女が近付いてきた。

「伊木さん……」

彼の名を呼んだ女の眼に、悲しみの色があつた。

「突然のこと……」

鄭重に頭を下げたが、その女が彼の名を知っていることを怪訝におもう表情になった。

「わたし、恭子ですわ」

「恭子さん？ 見違えた」

一瞬呆氣に取られて、彼は眼の前の女を眺めた。記憶にある恭子の二倍の容積はあつたし、陰気な翳は少しも無くなっていた。

「見違えるのも無理ないわ。わたし肥ったでしょう」

と、恭子もこだわらぬ調子で言った。

「ずいぶん前に、結婚なさったという噂は聞いていましたが」

「それが、主人は亡くなりましたの。一昨年ですわ。そしたら、急に肥り出してしまつて……。それにしても、ほんとにお久しぶりね、十五年ぶりくらいかしら。伊木さんも、そろそろ中年紳士のお仲間入りね」

彼はおもわず掌を腹に当てがった。洋服地の下の腹は、いくぶん盛り上りかかっているように